

リスクコントロール効果と心理コントロール効果

この方法は、価格変動のリスクをコントロールすることはもちろんですが、投資者の心理をコントロールするという利点も持っています。先月買ったファンドの価格が下がったからと悔しがったり、来月はもっと下がってしまうのではと恐れたりするのではなく、「安いときにはたくさん買えている。保有口数が増えれば、今後少しでも値上がりすれば利益は大きくなるぞ!」と思えばいいのですから。その点では、投資初心者の方にはお勧めの方法といえます。

ただし、この方法は、長期にわたって一本調子に下降するような商品には適していません。例えば、将来上昇の期待できない個別株式を一つ購入することでは、ドル・コスト平均法の利点は生かせません。ドルコスト平均法は、価格が変動していても、将来少しでもプラスになりそうなものを選ぶことが大切です。その意味で、分散投資と組み合わせ、将来の上昇を期待できる投資先を多く取り入れていくと効果的です。

こんな方には特にオススメ

このような積立方式は、預金などでもよく使われていますから、皆様にもなじみ深いものでしょう。預金金利が驚異的に低い現在では、まさに積立預金と同じような感覚で利用できると思います。そこで、実際にはどういう投資者に向いているかという点、

- ・サラリーマン、OL、年金取得者など、毎月定期的に収入があり、一定額を資産運用に回せる人。若い人、勤めはじめてばかりの人でも、毎月、少額から投資を始められます。
- ・子どもの教育費、老後の資金など、長期に積み立てておく

べき目的がある人。子どもの誕生を機に積立投資を始める人も多くいます。

・退職金など、現在手元に運用に回せる資金を持っているが、投資するタイミングで悩んでいる人。一時に全額を投資するよりも、時期を分散させることで、リスクを軽減することができます。

・退職金前払い制度をもつ企業に所属する人。最近、退職金を毎月の給与にプラスして支給する企業が増えてきました。今まで会社が積み立てておいてくれたものですが、毎月手元にくれば、つい使ってしまう。これは積み立てておくべきです。

・若い夫婦など、毎日、少しずつ節約できるものがある人。毎日飲む一杯 400 円のコーヒー、一箱のタバコ。ついつい消費してしまうそれらの金を、毎月少しずつ投資に回すことができます。

究極のリスクコントロールは長期分散投資

Smart Investor では、これまで、皆様の資産運用について考えてきました。なかでも、投資信託が資産運用には有効な方法であることはわかっていただけだと思います。市場の変化はだれにも予測できないのですから、大切なのは、できるだけリスクを小さくしておくことです。そのために気をつけておきたいことを以下にまとめておきましょう。

- ・商品を分散する - - 資金を複数のファンドに分散させる
- ・長期間投資する - - 投資期間が長ければ長いほど資産価値の変動リスクは小さくなる
- ・時間を分散する - - ドル・コスト平均法により、投資時期を分散させる。

以上で講座は終了です。

CFP 斉木正夫

Smart Investor

～ 賢い投資家のための資産運用講座 ～

第 8 号

定時定額投資のススメ

投資信託を始めようと考えている方のために、前号では「どんなファンドを選べばいいのか」お話ししました。しかし、いざ始めようとなると、今度は少しでも有利なときに買いたいという気持ちが起こってくるでしょう。今回は、「では、いつから始めるか」「どの時点で買えばいいのか」についてお話ししましょう。

投資のベストタイミングとは

安く買った株が値上がりして大儲けをしたという話を皆様もお聞きになったことがあるでしょう。そうすると、投資信託を始める場合にも、少しでもタイミングの良い時に買って大きな利益を得たいと思うのは人情。その時をはかりつつ、なかなかスタートをきれない方も多いのではないのでしょうか。

では、「その時」とは一体いつなのでしょう？ そんな時は、本当にくるのでしょうか？ 何度もお話ししている通り、市場はさまざまな要因で変動しており、相場がいつ下落するかを予測することはほとんど不可能です。「大底で買い、天井で売って大儲け」などということは、プロにしても至難の業なのです。ですから、一般の投資者である皆様が、ベストのタイミングを掴むのは不可能だと考えたほうが良いでしょう。

さらにいえば、長期投資をする場合には、スタートするタイミングはさほど大きな問題にはなりません。その理由を、これからご説明いたします。

ドルコスト平均法

長期投資でよく使われる方法に「ドル・コスト平均法」があります。これは、定期的に一定額で特定のファンドを買い付ける方法で、長期投資には特に効果的だといわれています。英語からの直訳なので、意味が通じにくいかもしれませんが、日本語にすれば「一定額定期積立法」とでもいえるでしょう。グラフでご説明します。

(グラフ1) 毎月1万円投資した場合のシミュレーション

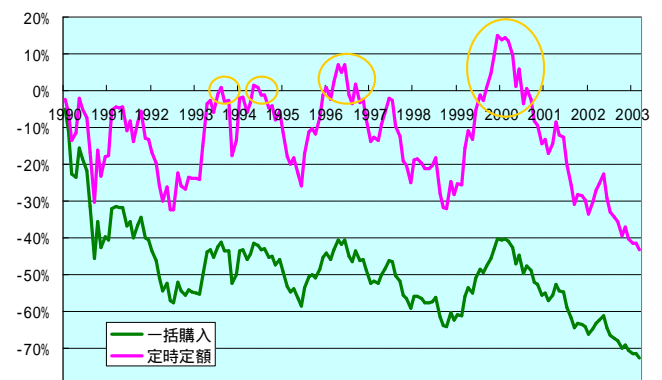


グラフ1は、毎月1万円を投資した場合の例です。ファンドの価格は折れ線グラフのように変動しています。スタート時に1口1万円だったファンドが、8,000円になった月は1.25口、5,000円に落ち込んだ月には2口買えることになります。このように、毎月1万円と額を決めて投資していった場合、長期的に(ここでは4か月で)見れば4か月、4万円で5.25口買えたことになります。

ファンドの価格が高いときには少なく、安いときには多くの口数を購入することによって、結果的には1口当たりの平均単価を引き下げる効果がでてくる。つまり、投資するタイミングを分散し、一時に高い価格で買ってしまいうリスクを低くするというわけです。

実際のデータを使って計算して見ましょう。グラフ2では、バブル絶頂期の89年末に日本の市場に一括で投資した場合と、時間分散で毎月少しずつ購入した場合を比べてみます。この十年で下落の印象の強いこの日本市場の中でも損益がプラスになる場面があるのが分かるでしょう。つまり、この「ドル・コスト平均法」を使えば、一時期に購入するよりも、下落リスクを軽減しながら投資ができるのです。また、一時期で購入するときには、いつ買うか、ということに神経を使いますが、「ドル・コスト平均法」を利用すれば、「いつ」ということはあまり気にせずに、はじめることができます。あなたがスタートしようと思ったときにすぐ始めれば良いのです。

(グラフ2) バブル絶頂期に日本市場に投資した場合の比較



TOPIXを使用し、1989年末に一括投資した場合、と毎月同額で少しずつ投資した場合の収益率